松原　隆一郎

（放送大教授・社会経済学）

❶社会科学と因果分析
佐藤俊樹著（岩波書店・3080円）

❷ＭＭＴ　現代貨幣理論入門
Ｌ・ランダル・レイ著、島倉原監訳、鈴木正徳訳
（東洋経済新報社・3740円）

❸反転する環境国家　「持続可能性」の罠をこえて
佐藤仁著（名古屋大学出版会・3960円）

社会科学の枠組みを検討して、衝撃を与えた本を三冊。❶は社会を「科学する」というとき、それを「エビデンスによって因果関係を特定する」という近年注目される考え方ととらえ、社会学の古典、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み返す。

❷は無限の財政出動を支持するスーパー・ケインズ主義のように理解され批判にさらされた「ＭＭＴ」の入門書。この理論の核心は、既存理論のように物々交換でなく、貨幣でモノを買う貨幣経済において、人々が不安からモノを買わない時に、どうすれば貨幣が流れるかを論じたことにある。その答えが租税と財政出動なのだ。

「環境に優しい」はずの政策が、現場で住民を苦しめるのはなぜか。❸は宇井純『公害原論』を引用しつつ、アジアに適用された環境政策の裏面を丹念に解き明かす。